フィニアス

なおこ Naoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィニアス

【Ｎコード】

Ｎ５４２６Ｚ

【作者名】

なおこ　Ｎａｏｋｏ

【あらすじ】

二人は別れ、お互いに別の人と結婚し、子供が生まれ、時を経て再び会う。忘れたはずだったのに、フィニアスの中に、彼女への思いが募っていく。そして、十六歳の乙女の青年への恋。青年の心の葛藤。自信家だったフィニアスの心も揺れ動く。忘れられないその面影。それは、分かれた後も、消えることのなかった残像なのだ。

笑顔

「フィニアス！」

森の中に響く声。

フィニアスは、ゆっくりと、弧を描くように振り向く。

木々の間から降り注ぐ光、

淡く優しい色の空気、

下草の緑、倒れた大木を覆っているコケ、柔らかな茶色の土で覆われた地面。

その声の主は、うねりながら続く獣道に立っていた。

風が木々の枝を揺らし、光の塊が辺りを照らす。

彼は目を細める。

「父さま！」

小さな女の子の声がした。

フィニアスは、駆けてきたその子を抱き上げる。

自分と同じ黒髪の巻き毛、五歳のニノン。

「フィニアス、あなたに会えないのかと心配していたのよ」

その女性は、笑顔で近付いて来た。

やはりそうだ。
変わらない笑顔。
彼女を何と呼ぼうか。

「フロース・・・そう呼んでもいいのかな？」

彼の戸惑いに、彼女は悪戯っぽい表情をした。
「いいわよ。
みんなもそう呼んでいるし」

彼女は別の名で呼ばれるようになり、長い間、音信不通だった。
そして、久しぶりに生家へ戻ったのだ。

突然、茂みが揺れ、十六歳くらいの少女が飛び出した。
そして、知らない男性が立っているのを見て驚く。

娘の目は、緑がかった銀色。
なんて美しい色だ。

フロースは、少女の髪についた木の葉を払い、服装を整え、フィニアスの方へ向ける。

「娘のノイよ」

フィニアスはニノンを降ろし、ノイの手を取る。
そしてキスをした。

「わたしは、プリオベール男爵フィニアスだ」

ノイはこの突然の挨拶に驚き、顔を赤らめながら挨拶する。

フィニアスは五十歳を過ぎている。
それなのに、
少年のような屈託の無い笑顔と、洗練された品格で、
少女の心を捉えてしまったらしい。

フロースは、女性の心をつかむのが上手いのは相変わらずだと思った。
はにかむ娘に、自分が若かった頃を思い出し、ふっと笑う。
彼に恋をし、失恋していた。

ところがニノンは、ノイを取られると思ったらしく、父親に真剣な顔を向ける。

「ノイはわたしのお姉さんよ」

フィニアスは方膝を付き、ニノンと同じ高さになって微笑む。
「それは良かった。
だが、ニノンは、父さまが好きだったんじゃなかったのかな。

会うのも久しぶりなのに」

ニンンは、にっこりすると両手を父親に伸ばし、その首を抱き、頬にキスをする。

「もちろん、父さまが一番よ」

走り出したノイとニノンを目で追いながら、
フィニアスは、フロースに腕を出してエスコートしようとする。
彼女は呆れるように言った。

「わたしはこの森で育ったのよ」
「いいじゃないか。あんたを貴婦人として扱ってるんだ」

彼女は彼を見、仕方が無いという表情をして、自分の手をその腕に通す。
そうして二人は、ゆっくりと歩き出した。

木々の、衣擦れの音だけが聞こえる静けさの中、時折、ノイとニノンの声がする。

「ノイは、この森が好きみたい」

沈黙を破るようにフロースが言った。

「そうか、だからニノンはノイを気に入ったんだ。
ディフォーレスト家の血だな。

プリオベール家の領地は草原が多いんだ。
美しい土地だけれど、ニノンはこの森の方が好きらしい」
「まあ、ニノンは、あなたに似ているのに？」

その時フィニアスは、
「ニノンの笑顔は、あんたにそっくりだ」と言おうとして止める。
この笑顔が好きだったのに、彼女を手放したのは自分だった。

そして彼女が遠くの地で結婚したと聞き、諦めたはずだったのに、
彼女の面影がある姪のアデールと結婚してしまった。

フロースとニノンは血で繋がっている。

ノイとニノンの声が遠ざかり、
フィニアスは、
自分とフロースの足音、
そして、時々、彼女の長いスカートが下草に触れる音を聞いていた。

こうして二人で歩いていると、
全てのことは遠くへ行ってしまい、自分たちだけが存在しているか
のように思える。
彼は、フロースの横顔を見下ろす。

分かれた時、彼女はまだ二十一歳だった。

あれから、二十年以上の月日が経っているのに、
目の前の彼女は、なんと生き生きして美しいのだろう。
そして、この香り。

「ああ、スパイスだ」とフィニアスは思った。
ラーウスのスパイスが、彼女を遠くへ追いやってしまった。

フロースはフィニアスを振り向くと、「何？」とでも言うように無邪気な顔を見せる。

そう、その笑顔。

「フロース、キスしてもいいかな？」

フィニアスは、彼女の耳にそっとささやいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5426z/

フィニアス

2011年12月18日10時51分発行